KIF UPDATES
公益財団法人かながわ国際交流財団
活動紹介記事などFacebook 抜粋版
www.kifjp.org/045-620-0011　　2019年11月1日発行

KIF Facebookコラム　Vol. 11
川口市芝園団地の多文化「共存から共生へ」
専務理事　水田　秀子

先日、外国人住民を巻き込んだ自治会活動で有名な芝園団地を訪ねました。台風15号の影響から、関東一円の公共交通機関が止まった大混乱の日でしたが、市内に前泊していたため、突風や暴風雨などの被害にも会わず、太陽がギンギラ照り付ける当日を迎えました。

市内在住の友人を介して、NGO多文化共生協働センター・川口の中村義郎事務局長さんに現地を案内して頂くことになり、団地内の駐車場で落ち合い、まずは団地の全容を概観。1970年代、当時の住宅公団（現在のUR）が建てた12棟約2500世帯の中規模な団地ですが、建物や木々の多い中庭は手入れが行き届き、清潔で明るい雰囲気。平日の午前中、親子連れや子どもたちが三々五々たむろして、いい感じのコミュニティ空間が広がっていました。

住民のほぼ半数が外国人で、その9割が中国人。団地内には中国の食材を店頭に並べたスーパーや中華料理店、中国語の名前のついた保育園などがあって、中国感満載。川口市は、東京都足立区や江戸川区に隣接していて、都心へのアクセスが良いため、IT関連の企業などに勤める若い中国人夫婦が多数住むようになったのだそうです。隣接の公民館では、働き手の男性が休日の日曜日に日本語を学ぶ教室があり、最近、自治会からの要請により、家で孤立しがちな子育て中のママたちを対象にした、子連れ参加OK、月曜開催の日本語教室が立ち上げられたところでした。当日は、ちょうど月曜日でしたが、交通機関が動いておらず地域外から参加しているボランティアさんが来られないため、教室は中止となり、近隣の方たちが教材づくりに励んでおられました。熱心な取組みに感心していると、ボランティアさんのお一人が「集住していると、中で固まってしまい、外と交わらないんですよ、まだまだ多文化共生とはいかないなあ、多文化共存だね」と笑っておられました。

人口60万人の川口市には、現在約3万6千人の外国人が住んでおり、この人数は、全国の市区町村中、新宿区、江戸川区に次ぐ第3位とのこと。神奈川県内で外国人住民比率が高い、横浜市中区が17,310人で23位、川崎市川崎区が16,271人・25位、横浜市鶴見区が13,180人・30位ですから、その多さにびっくりしました。

国籍別には、6割が中国で、ベトナム、韓国、フィリピンと続き、5位にトルコ約1200人が入っているのが特徴的です。芝園団地のある芝地区も、約7,500人（人口の20%）のうち、中国人が5000人、2位はトルコ人の500人とのことです。（この情報は、川口市の協働推進課多文化共生係からご提供いただきました。）川口市では、かわぐち市民パートナーステーションで日本語ボランティア入門講座を開催し、卒業生に対して市の担当部局や講座の指導者（日本語教育の専門家）が積極的に働きかけ、10地区ある行政区の外国人住民の状況を見極めながら、各地区の公民館等で日本語ボランティア教室が開催されています。芝園団地のママさん教室は、その20番目に当たり、生まれたてほやほやの一番新しいクラスだそうです。

私たちの財団では、今年から文化庁の「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」を県から受託し、県内各地の日本語教室の設置状況や市町村による支援の現況などを調べ、今後地域の日本語教育のあり方を検討、県とともに体制を整備し、事業を計画していく予定です。川口市の外国人市民のニーズ分析などの積極的な姿勢も参考にさせていただき、一方、外国人子育て支援チャートなど、当財団で作成した多言語資料を提供し、活用して頂くなどの交流を始められればと感じました。

マルパ実践報告フォーラム2019
小田原市文化セミナー特別編が開催されました！

7月20日（土）、小田原市文化会館にて、「マルパ実践報告フォーラム2019・小田原市文化セミナー特別編」が開催されました。群馬県や静岡県等、遠方や他県の方々も含む63名の方々が参加され、マルパが取り組む、多文化共生や共生のための教育普及活動に、関心を寄せる学芸員や研究者が増えていることが感じられました。

実践報告においてマルパからは、アーティストと感覚特性者※が、茅ケ崎市美術館まで（から）の道のりを歩く協働体験とそれを基に開催されている展覧会について「インクルーシブデザイン手法を活用したフィールドワークから表現へ」と題した報告（茅ケ崎市美術館・藤川悠さん）と、美術館を会場とした外国につながる子ども・若者たちが参加した撮影会について、「外国につながる子ども・若者たちへのエンパワーメント―美術館とアートの力」と題した報告（神奈川県立近代美術館・鈴木敬子さんとKIF野呂田）を行いました。

アーツ前橋（今井朋さん）からは展覧会「表現の森」を介した、ひきこもりの若者たちとアーティストの出会い、その後の変容を扱った「生きることに寄り添う表現とは何か」と題した報告があり、NPOスローレーベル（野崎美樹さん）からは表現活動への障がい者のアクセスを可能にする人材育成について「共創のための「人」と「環境」をつくる」と題した報告がありました。

パネルディスカッションではマルパ実行委員の平井宏典さん（相模湾・三浦半島アートリンク）が加わり、武蔵野美術大学教授で教育普及を専門とする杉浦幸子さんの司会の下、実践報告を踏まえインクルーシブなアートプロジェクトを進めていく上での実務上の課題等について話し合いました。最後に行われた情報交換会では、参加者同士の名刺交換が活発に行われ、まさしく熱気と興奮が溢れんばかりのフォーラムとなりました。

※主に障がい者の感覚に焦点をあて、障がいとしてではなく、その人の特性として呼ぶ造語

外国人住民子育て支援フォーラム2019を開催しました

2019年8月24日（土）に、「外国人の妊娠から子育てを支えるガイドブック」の発行を記念した支援者向けのフォーラムを開催しました。当日は総勢126名が一堂に会し、母子保健（医療機関・行政）・子育て支援・外国人支援に携わる方々や大学の研究者や学生などにご参加いただきました。

第一部では、財団の子育て支援事業の概要、日本で子育てする外国人ママの気持ち・現状をフィリピン・ベトナム・ネパールの方から話をいただき、病院・行政・地域で行ったワークショップの実例をそれぞれの現場の方から紹介しました。

第二部では、「外国人の妊婦・子育てを支えるためには」をテーマに、グループに分かれて話し合いを行い、付箋やワークシートにまとめました。

最後の第三部では、ガイドブックの監修者である中村安秀さんと渡邉洋子さんに2部でのグループ発表をまとめていただき、外国人の妊娠・子育てを支えるネットワークづくりについて、連携の大切さをお話いただきました。

当日は残暑の厳しい一日でしたが、それ以上に会場の皆さんの外国人住民子育てに関わる熱い気持ちが感じられました。

これをスタートに日本で母子保健や子育てに携わる皆様とともに外国人への支援をさらに考えていければと思っています。

グローバル・セミナーを開催しました

財団と国連大学が共催する「国連大学グローバル・セミナー」が、昨日終わりました。

「グローバルな行動で　国際テロに立ち向かう」と題した今年のセミナーには、国内外から約90名の大学（院）生や社会人の方々が参加しました。

防衛大学校の研究者や国連機関職員、イスラム研究者、紛争国でテロに立ち向かうNGO代表などバラエティに富んだ講師陣による講義と、少人数グループによるディスカッションを通して、テロの原因の複雑性や各アクターによる対応策などについて学びました。

朝から晩まで3泊4日間、熱心に学び、意見を交わす参加者の方々の姿を見て、事務局一同嬉しく思いました。

＊今回のセミナーの報告書は来年3月に出版予定です。また、過去の報告書は下記リンクよりご参照頂けます。

http://www.kifjp.org/shuppan/shonanreport

お知らせ

◆「21世紀かながわ円卓会議」

① 2019年12月14日(土)午後
ミニシンポジウム「多文化共生における教育（仮題）」を横浜で開催します。本シンポジウムでは、若い世代のスピーカーから、自身が受けてきた教育等を踏まえつつ、多文化共生社会を築く上で大切な視点についてお話を伺います。

② 2020年2月15日(土)午後
鈴木江理子さん（国士舘大学教授）を招いて円卓会議2年間（2018-2019）のまとめとなる総括シンポジウムを横浜で開催します。
＊各々の詳細については財団HPやFacebookなどでご参照ください。